有朋自遠方来

講演する富岡益太郎氏

講演「祖父母の思い出」

鉄斎は代々続いた京都三条の法衣商の次男として誕生しましたが、幼少時に胎毒が内攻して聴覚に故障を起し、そのため商人にはならず学問の道に進みました。――富岡鉄斎展に因んで当館が去る6月6日に開催しました鉄斎の孫、富岡益太郎氏の講演はこのような切り出しで始まりました。鉄斎の長男謙蔵氏亡き後、巨匠鉄斎の直系の肉親者である益太郎氏は現在、宝塚市清澄寺にある鉄斎美術館の館長であります。氏の講演は静かな語り口の内に、身近かな人でなければ語り得ない晩年の人間鉄斎の日常を彷彿とさせるものでした。以下、その講演の中から一、二を抜萃しますと―――

「私は鉄斎七十二才の時に生まれ、父の謙蔵は京大文学部の講師でありましたが、一家を養うに及ばず、従って一家の生計は全て、祖父鉄斎が負っていました。鉄斎の“額書き”の日は一ケ月に一度決めておかれ、その日には八畳の間が整えられて、朝から家中で墨をすり、いよいよ清書という時には幼少の私も条幅のはじをおさえるのを手伝いました。父は辞書の書くべき文字の個所に箋をはさんで置き、筆を持った鉄斎の脇で、この字を書くのですよと念をおすと、鉄斎はそれを横目でチラリと見てサッと筆を運び、一挙に鉄斎独特のくずし文字を書くのでした。鉄斎の運筆は本当に普通の人には見られない速筆でありました。鉄斎の割り合いにクニャクニャとくねった文字の一因はこの速筆にもあるようです。

食物は熱いものが好きで、熱い粥に熱い番茶をかけたお粥の茶漬を食べました。朝は魚は取らず、野菜と梅干でしたが牛乳は毎日二合、これも熱いのを好み、鉄斎の風貌を独特なものにしているあの白い髭に牛乳の湯葉がくっついていることもしばしばありました。それも祖母とさし向いで食事をするのではなく、一人であり、給仕をつけることも嫌いでありました。

本好きの性格は震災で焼けた東大の書庫や湯島の聖堂の記事を丁寧にスクラップしていることにも現われていました。旅行家鉄斎は携帯用の水濾し器の広告をノートに貼り、また、鉄斎は宋の大詩人蘇東坡と同じ月日に生まれましたので蘇東坡の赤壁への舟遊に倣って宇治川で会を開き、外出の際には東坡巾を被っておりました。―」

若い時から何くれとなく面倒をみた蓮月の長生きせよとの言葉通り、長寿を全うした鉄斎は、後年になるほど傑出した作品を残し、後世に名を遺したのでありました。

季刊 美のたより No.36
昭和51年 6月30日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.